

「原爆の痕」

宮岡 力

近藤寿学長の命を受けて、私は高橋貞雄教授と二人で、総合大学としてのふさわしい用地を探しに八月二日に広島を出発した。山陽沿線を廻って八月五日に西条営林署関係の土山国有林のことから、当時原村の暁部隊の農場（後に文理大賀茂農場）を訪れるべく、原の実家へ夜遅く立寄った。

奇しくもこれが命拾いになるうとは、翌朝八月六日朝食を終った頃、ピカツといなびかりのような閃光を感じた。外に飛び出て見ると広島の方角で黒い煙を伴うた火柱が立ち、だんだん茸雲になった。これが原爆投下で、同時に一台の飛行機が急しく山陰に逃げて東へ向った。

晩部隊を訪れて、広島がえたいも知れない爆弾により廃墟になっているという話を聞いて、すぐ帰り仕度をしたが、とても広島へは今日は帰れない、汽車も海田までしか行かない。時刻も定まらないとのことから帰広を翌日に延した。

【八月七日】

沢山のにぎりめしを防空頭巾袋に入れて八本松駅に出た。汽車は予定がつかないということで暫く待っていると丁度駅

前にトラックが停車し、救援医師を十数名乗せて広島へ行くといふので。早速公用腕章を腕に着けて高橋教授と私は自動車に飛び乗った。

広島市内は文字どおり廃墟化した焼野ヶ原で、流川の勸業銀行前で下車したが、道路はすべて焼け毀れた瓦でふさがれ通られそうもないので平塚町の川沿いに下って南竹屋町の高橋教授の宅の焼跡に急いだ、家族の人影もないのを確認して、高橋教授もやや安堵して大学グラウンドに出た。

グラウンドでは被爆罹災した学内の職員の方が数家族居られたようだが、晴山省吾教授もその一人であった。晴山教授から家族の若干の消息を聞いた高橋教授は罹災家族を尋ねて宇品方面に向われた。私は別れて大学本部へ向った。

大学校内に午前十一時頃帰り着いた。職員は誰もいない。私の居た附中の生物準備室から工作室の焼跡を一巡して、更に附中の校舎跡に廻った。瀬群敦教諭は庶務室で、岡本恒治教諭は地歴準備室、西村助手は英語準備室で、それぞれ廻転椅子の金具と共に一塊の焼けた白骨となつた。大学本館は玄関の左側が二部屋残つただけで他は全部焼けていた。本館内を三階まで一巡したが、コンクリートの地肌が出て、不気味なものであった。

満窪鉄夫教諭（当時附中理事）が学校に顔を出された。彼は八月五日は学校（附中）に宿直し朝早く昭和町の自宅に帰って朝食を摂っていたときに被爆し、戸棚の下敷きになつたが僅かな怪我で命拾ひした。直射閃光を浴びていないので、

健康そうであった。その他一人二人学校に顔を見せられたが、誰であったか名前をおぼえていない。

炊事場の方から飯炊釜を探しているということを聞いて、私は当時附中の寄宿舎攻学寮の舎監をしていたので、私の住んでいた舎監住宅から、炊事の水流しの下に隠しておいた縁の欠けた一升炊きの釜を持ち出して炊事場に届けた。

午後三時頃北門を出て、打庭町に住んでいる従兄弟（当時大学事務職員 平坂逸夫）を訪れ、ねぐらを求めようと相生橋を通過して横川方面へ向った。途中の目撃した悲惨な状態は省略して、打越町の従兄弟の家の玄関の戸を叩いたが、留守で返事がないので、多くの人々が避難している三滝の藪土手に出て、避難民の人々と一緒に藪の中で寝た、従兄弟の平坂逸夫は八月六日出勤すべく、大学の北門前で被爆し、似島から宮島へ転送され、後に郷里に帰へって四十日ぐらい後に死んだ。

【八月八日】

朝目が覚めると横川に出た。駅前で炊き出しのにぎり飯を二個もらって、相生橋を通過して、紙屋町から電車通りを大学に向った。原爆の死の影の人間も銀行前の石段に腰かけて真白く火傷の薬を塗ってもらっていた。大学の正門前には駄馬が両眼を一〇糞ぐらいとび出してじいっと立っているのが見られた。

本部では東洋工業に出動していた高師生を呼び返して、焼跡の死体整理にかかった。私は火葬する場所を作ってくれという事で、附小の北側に火葬穴を三つ掘って、焼け残った木片を集めるよう学生を指揮した。当時は附小を事務局本部にしていたので、この周辺に死体が多かった。学生主事の高橋悦郎教授は附小の下水槽の中に死体となって浮んでいた。

附小の二階の廊下には学生主事補の先生だったか頭が割れて黒焦げの死体となっていた。岩村寅之助教授は衣服を纏うたままの外傷のない死体であった。村上大作書記は人別もはっきりしない黒焦げの死体であった。身元の判った死体を三ヶ所の穴に入れて木片を沢山かぶせて火葬の用意が出来たところで、小机を持ち出してローソクと線香を机の上を立てて、黙禱を捧げたことを憶えている。

ところで遺族の参列もなく、私と満窪教諭と二人ですべて事を運び他の学内の人の参加もなかったような気がする。読誦も念仏もなく、日没近くに火をつけた。そして満窪教授と私が隠坊をやった。

火をつけた間もない頃村上大作書記の息子さんが来られて、父もついでに焼いてもらいたいと、火葬の火の中に村上大作書記の遺体を投げ込まれたことも憶えている。

夕闇もせまり、夜も更ける頃火葬の灰燼から青い燐の火が燃え上り、隠坊にいる私達も気味悪くなって、火の仕末を充分にして、満窪教諭と二人で大学の玄関横の焼け残った部屋の机の上に寝た。夜中に敵機（米国の飛行機）がぶんぶん飛

び廻っていつまでも寝れなかった。

【八月九日】

この辺から、日の区別がはっきり判らなくなってきたが、私は十九日頃まで、大学本部に寝泊して毎日焼跡の片付や死体の捜査確認にあたり、更に罹災避難者の捜査にあたった。

以下思いつくままに記載する。

○九日頃に玄関横の部屋に誰がどこから求めたのか畳を持ちこんで敷き、寝泊りできるようにした。

○十日過ぎ頃福井事務官が帰広出校し、本館玄関前の校庭に畳を敷いて本部宿泊所を設けた。

○炊事場を食堂として利用した。

○暁部隊から兵数名を派遣され（附中生徒の父兄で聴部隊の将官から）大学南門から千田町の附中農園までの道路の焼瓦を片付けて、生徒の遺体、遺骨を捜査した。捜査に数日を要し、三つの遺体、遺骨を発見した。

○罹災職員の捜査のため十三日頃似島へ行った。

○罹災した菊池教諭の捜査のため満窪教諭と二人で十五日に小屋浦へ行っての帰路、汽車の中で終戦の詔勅を聞いた。

○高橋教授の罹災家族を尋ねて甘日市町平良へ行った。

○従兄弟の平坂事務職員を尋ねて宮島へ行った。

○原爆でかぼちゃ（南瓜）が焼けていると、食糧増産の畑から持ち帰って、食べられると、騒いでいる人もあった。

○附中農園の倉庫に分散しておいた私蔵図書が焼け残ったので小説類三十冊ばかりを持ち帰って本部の宿泊所に置いたがいつの間にか数が減って月末には僅か五、六冊になっていた。

○河野通区主事は攻学療の風呂釜に隠匿しておいた花瓶や置物等の家宝顔を取り出し、持ち帰って本館玄関口の受付部屋に
沢山並べられていた。